

【氏名】ムズラックル ハリト

【所属】(助成決定時)

大阪大学大学院文学研究科(日本学専攻)

【研究題目】 世界における「Rakugo」の可能性

【研究の目的】

本研究の目的は以下のとおりである。

- 1) 落語(日本の笑い)の国際化
- 2) 外国人による真面目で堅物な日本人のイメージの変化。
- 3) 外国人の目で日本人・日本文化を覗き込むこと。それによる日本文化の再認識。

日本文化を笑いながらよりよく理解してもらおう、ということが、第一の目的である。たとえば、よい例が「時うどん」に出てくる、うどんをズルズルと音を立てて食べる場面がある。欧米では、悪いマナーとされているが、落語で説明をしながら、笑わせながら演じると、欧米の観客も「ああ、日本ではそうなんだな」とサラッと受け入れているのである。

それから、その異文化の言葉である英語で落語を披露したり、翻訳したりすることは、異文化の言葉を介して日本文化を再認識することに繋がっている。つまり、英語で落語を演じることは日本人にとっては、日本文化を再発見できるような場を提供している。そして、日本人の観客が日本文化を外国人の目で覗き込むような術を会得していくことも期待される。

【研究の内容・方法】

本研究は、外国人のプロの落語家を通して問題を考え、まずは、彼らは落語のこういった特徴に惹かれ、彼らにとっての落語は何である(あった)のか、というようなことを明らかにすることを試みた。それによって「世界における落語」の可能性、或いは広く言えば「世界における日本の笑いの可能性」を考える上で大きなヒントを得ることができた。

したがって本研究では、明治から大正にかけて人気を呼び、多くのレコードや速記本を残しているたった一人の外国人の落語家である「快樂亭・ブラック」に焦点を当てることにする。彼の速記本やレコードを徹底的に分析し、彼自身の言葉から「Rakugo」の魅力を探ることにする。それに加えて、現在英語落語のパフォーマーとして活躍しているプロの落語家と直接インタビューを行い、彼らの経験を通して「世界における落語の可能性」を考えることにしました。そして、最後の段階として、外国人のパフォーマーの立場から、私は外国人のみを対象に落語を披露し、外国人の観客の反応や意見をデータとして集め、分析することにも試みた。

- ・ 初代目快樂亭ブラックの速記本やレコードを調べ、彼の作品や言葉を社会的な面、文化的な面、そして異文化理解を通して、徹底的に分析する。
この作業は東京にて行われる。
- ・ 大阪や東京にて、外国人の観客を集め、適切なホールで落語会を開き、

アンケート調査を行う。(アンケート回答者数は 500 人の予定)

- ・ 東京と大阪で活躍している、海外公演の経験のあるプロの落語家とインタビューを行う。
桂かい枝、ダイアン吉日(大阪)、柳家さん喬(東京)

【結論・考察】

実際に高座に上がって数多くの英語落語を披露した。落語を聴いて外国人の観客はどう思ったのかを聞けるチャンスもあった。しかし、外国人客数は非常に少なく、期待通りの外国人の観客はほとんど集まらなかった。全ての公演は心細い結果となったが、これは Rakugo の現状を示すものであったのかもしれない。日本人でも落語に関心のない人の方が多いという現状の中、どうすれば、外国人が Rakugo をもう一度聴こうと思えるか、という課題が残った。

また、トルコをはじめとする海外公演ができなかったことも、外国人観客が集まらなかった原因の一つであるが、プロの落語家とのインタビューを通して理解できたことは、日本国内における英語落語とは英語の楽しい学習方法又は、落語の新しい楽しみ方として考えられることである。しかし、国外における英語落語は、個人的なチャレンジにすぎず、世界に注目されるような新しいものを提供することはないようである。

しかし、日本国内において、英語で落語を演じることは日本人にとっては、日本文化を再発見できるような場を提供しているような印象を受ける。英語落語のおかげで、日本人の観客が日本文化を外国人の目で覗き込むような術を会得していくかもしれない。